『聖なる泉』におけるコミュニケーションの不可能性

長　柄　裕　美

(平成6年6月21日受理)

はじめに

『聖なる泉』(*The Sacred Fount* (1901)) は，ヘンリー・ジェイムズ (Henry James (1843-1916)) の中期の実験小説を締めくくる，きわめて個性的な長編小説である。その評価はもちろん，J. F. ブラコール (J. F. Blackall) が指摘するようにこの作品の中で何が起こるのかについてさえ，批評家の間で共通の認識が得られてはいるとは言い難い。(1)その曖昧さゆえに，多くの読者にとってこの作品を読み進めることは，絶えざる苛立ちと虚無感にさらされることを意味している。レベッカ・ウェスト (Rebecca West) がこの作品について，「雀同士の関係と大差無いつまらぬ関係の有無を探るために，カントが『純粋理性批判』に費やした以上の知力を浪費したもの」，と揶揄したのは有名である。(2)この作品の正しい読み方は，D. W. ジェファーソン (D. W. Jefferson) が指摘するように，謎の解明を諦めることから始まるのかもしれない。(3)この小論は，『聖なる泉』という作品の持つ唯一絶対の意味を求めることを避け，読者と作品との間の伝達を不可能にし，意味の読み取りを拒むために仕組まれた語りのメカニズムを明らかにすることによって，作品の曖昧さに込められた意図を探ろうとするものである。

吸血鬼のテーマ

『聖なる泉』は，ロンドンの社交会を題材に，一貫して一人称で語られる物語である。語り手「私」(“I”) は，過去のあるパーティーでの経験を振り返って，自省的に語っている。

物語は，「私」が招待を受けたロンドン郊外のニューマーチ邸 (Newmarch) へ向かう途中の列車の中で始まる。ニューマーチ邸の常連客でもある二人の人物，ギルバート・ロング (Gilbert Long) とグレイス・ブリセンデン (Grace Brissenden) に会った「私」は，二人が見違えるほど変化しているのに驚かされる。ハンサムなこと以外に取柄がなく，愚鈍で気のきかない「見栄えのする人間家具」(“a fine piece of human furniture”) (4)とでも言うべき存在であったはずのロングが，今では洗練され，知的で社交的な人物に変身している。そして長い間不器量だったブリセンデン夫人は，

今では一目見て誰なのかわからない程に美しく変身しているのである。この「私」の印象は，それぞれブリセンデン夫人とロングとの会話によって，客観的なものとして確認されているが，この時二人が相互の変身について漏らした言葉が,「私」のその後の限りない想像に火をつけることとなる。

まずロングは，あまりにも年が離れているために「子供をかどわかしたようなもの」(“a case of child-stealing” (p. 5)) という噂のたった４，５年前のブリセンデン夫妻の不自然な結婚について触れ，夫人が４２，３歳，夫は３０前という現在の年齢を暴き出す。続いてブリセンデン夫人は，ロングの変身が，ラトリー卿夫人 (Lady John) との関係によって着々と知性と弁舌を与えられた結果であると指摘するが，「私」は思わず「肝油」を連想して次のように言う。

> “Well, you may be right,” I laughed, “though you speak as if it were cod-liver oil. Does she administer it, as a daily dose, by the spoonful ? or only as a drop at a time ? Does he take it in his food? Is he supposed to know ?” (pp. 10-1)

この連想は社交上のその場限りのジョークとしては面白いが，それが真剣な妄想へと発展して行くのがこの物語の行くえである。しかもこの「肝油」は，一方が自らを犠牲にして抽出し，他方に与えるものであり，与えれば与えるほどその源は枯れて行くことになる。タイトルの「聖なる泉」とは，この有限の源泉の象徴的表現にほかならない。

ニューマーチ邸に到着した「私」は，この二人の変身の謎の解明に興味津々である。ブリセンデン夫人の夫，ガイ・ブリセンデン (Guy Brissenden) は，見間違えるほどに年老いて見え，３０歳前だのに６０歳と言っても言い過ぎでないほどであり，一方４２，３歳でありながら２０歳にしか見えない夫人と好対照をなしている。「私」は，友人であり画家のフォード・オーバート (Ford Obert) を相手に，ブリセンデン夫人の「奇跡」についてこう語っている。

> “One of the pair,” I said, “has to pay for the other. What ensues is a miracle, and miracles are expensive. What’s a greater one than to have your youth twice over ? It’s a second wind, another ‘go’ —which is’nt the sort of thing life mostly treats us to. Mrs. Briss had to get her new blood, her extra allowance of time and bloom, somewhere; and from whom could she so conveniently extract them as from Guy himself? She *has*, by an extraordinary feat of legerdemain, extracted them; and he, on his side, to supply her, has had to tap the sacred fount.” (p. 29)

この夫婦の外見上の対照は，「私」の「肝油」や「聖なる泉」の空想に見事に一致する例である。しかし，ブリセンデン夫人のいうロングの相手，ラトリー卿夫人の場合は，これに一致しない。ロングに「奇跡」を起こした女性は，自己の全てを犠牲にして彼に捧げているはずであるのに，ラトリー卿夫人の知性にはなんら変化が見られないというわけである。「私」はブリセンデン夫人に対

して，ラトリー卿夫人の「しゃれたショーウィンドウには何もかも全部そろって」おり，ロングは「どこかほかの店で買物をしているに違いない」（“The whole show's there behind her smart shop-window. . . . he deals at another establishment.”）と言う。そしてこの「ほかの店」を探すことがその後の「私」の最大の関心事になるが，そこでは全てを売りつくして「シャッターを閉め，店を閉じてしまっている」（“she will have put up the shutters and closed the shop.” (pp. 35-7)）はずだと言う。すなわち自らの知性を捧げ尽くして完全な「白痴状態」（“idiocy”）に陥った女性こそ，ロングの相手だというのである。

ブリセンデン夫人は，前言を翻してこの「白痴状態」に到達した女性は，不幸な境遇にあるメイ・サーヴァー（May Server）であると指摘する。オーバートによれば，彼女は以前肖像画を描いた頃とは違い，落ち着きなく動き回っては男性に次々と「飛びついて」（“dart”）いるという。はかなげで軽薄な今のサーヴァーは，ロングに知性を吸い取られた抜け殻と呼ぶにふさわしい女性と見なされるのである。サーヴァーに密かに心ひかれる「私」は，この説に表向きには反論しつつも，彼女の行動を追いかけることになる。

以上が物語の冒頭部分の内容であるが，ここに示される「私」のいわゆる「理論」（“theory”）または「法則」（“law”）は，多くの批評家によって「吸血鬼のテーマ」（“vampire theme”）と呼ばれている。すなわち，男女関係を吸血鬼とその餌食の関係とみなし，必ず一方が他方を犠牲にしてその養分を吸い取るのだとする考え方であり，外見的にはパーティーというありふれた舞台を扱いながら，この作品が「ねじの回転」（“The Turn of the Screw”, 1898）と双生児の関係にあると言われるのは，この怪奇性のためである。言うまでもなく，ブリセンデン夫人は夫から若さを，ロングは恋人から知性を吸い取り，吸い取られた側は，それをきちんと失っているはずだと言うわけである。実際，ブリセンデン夫妻が「吸血鬼ー餌食」関係に当てはまるかのように見えることは物語中の他の人物も確認しており，この「理論」は，「あたかも・・・かのようだ」という比喩表現を含んだジョークとしては充分受容可能である。しかし問題は，そのジョークが「私」の頭の中で比喩から現実へとすり替えられてしまい，いつのまにか語りの表層にまことしやかに居座ってしまうことである。文字どおり妻が夫の若い血を「吸い取」ることによって若返り，夫は「吸い取」られた結果老いてしまうという説はあまりに幻想的であり，この時点で，読者はこの物語をどこまで現実的に受け取っていいのかという戸惑いを感じさせられる。そしてさらに読者を浮き足立たせるのは，「若さ」の点で一見成り立つかに見えたこの「理論」を，拡大解釈して「知性」にも無理やり当てはめようとしたことである。これも社交上の言葉の遊びと考えれば，悪趣味だが気のきいたジョークと言えなくもないが，現実には一方が他方からいかに多くの知性を吸収しようとも，与えた側の知性が「減る」ということは有り得ない。したがって，この拡大解釈の結果が，ロングの相手がラトリー卿夫人でないことの「根拠」として物語の筋書きを堂々と決定して行くとき，読者は「私」

の語りから一歩身を引き，真理に至るはずの道を独自に探って行かざるを得なくなるのである。言うまでもなく，ここにあるのは人間関係をきわめて機械的に，浅薄に捕らえる非人間的視点である。人間関係とは，奪い奪われるだけでなく互いに与え合い，豊かさを二倍に増やしていくものでもあるという血のかよった認識が，「私」の発想からは完全に抜け落ちているのである。(5)

こうして読者は，きわめて現実的な社交の現場を前にして，非現実的で空想的な「理論」を受け入れるよう強要される。この座りの悪さは，物語が進行して行くにつれて，増すことはあっても決して減ることはない。宙に浮いた読者の足は，読み進むにつれてさらに虚空を蹴る空しさを感じさせられることになるのである。読者が自らの足でしっかりと物語の地面を踏みしめつつ歩むことができないこと，その距離は読み進めば進むほど大きくなり，何が物語の現実であるのか，ほとんど確認不可能になることこそが，実はこの物語の現実である。

「理論」の裏付け

物語の冒頭部分で自己の「理論」を打ち立てたと自負する「私」は，全身を目と耳にして，その「理論」を裏付ける証拠を手にいれようと躍起になる。そして「理論」の正当性を確認するためには，同時にその欠落部分であるロングの恋人を特定せねばならない。「私」は，他人を「観察」し，他人と「会話」し，さらに他人の「目くばせ」や「しぐさ」さえ見逃さず，そこに隠された「意味」を求めて行く。読者は宙づりになった居心地の悪さに堪えつつ「私」の錯綜した思索を辿って行くが，「私」の熱心さと反比例するかのように，この裏付け作業への読者の信頼は薄れて行くのである。そこに客観的な情報を求めようとする読者は，全てが「私」の主観的，意図的解釈で潤色されていることに気づかざるを得ない。その色付けをできる限り排除しながら，その裏にある現実を読み取ろうとすることは，ほとんど徒労に終わるのである。

「理論」の裏付け作業として，まず「私」の独特の「観察」方法を示す例をあげる。

「サーヴァーがロングの恋人であれば『理論』にかなう」というブリセンデン夫人の言葉からサーヴァーを守るべく，「私」は彼女の観察に熱心になるが，彼女と言葉の少ない会話を交わしただけで，気がとがめつつもブリセンデン夫人の説の正しさをすでに確信している（“There *was* no question, I had compunctiously made up my mind, for Mrs. Server.”）。その「証拠」は彼女とロングの間に「完全に自然なやりとり以外何一つ観察されないという事実」だと言い（“The proof of it would be, between her and her imputed lover, the absence of anything that was not perfectly natural.” (p. 51)），直後に二人が一緒になった場面でそれを確認する（“They're natural, they're natural.” (p. 55)）が，この場合，「私」の確信はその証拠の確認の前に起こっており，しかも確認する内容がすでに予告されていることがわかる。さらに「自然であること」というあまりにも曖昧で主観的な判断内容が，

当然のように問題の「証拠」とみなされるのは，「私」の観察が「理論」の成立を前提とし，それに合致するよう自在に解釈され得るものであることを示している。しかも，「私」自身はオーバートやブリセンデン夫人の言うサーヴァーの変化を，未だ実感し得ていないのであるから，その矛盾はなおさらである。サーヴァーをめぐるその後の様々な観察は，不本意であるという素振りにもかかわらず，「私」の「理論」への確信をさらに強化するものとしてのみ働いている。

「私」とその「理論」の虜になったブリセンデン夫人は，目まぐるしく入れ替わるパーティ客達の一瞬の組合せを，共に詳細に観察し，またその情報を交換し合う。その中で問題のロングとサーヴァーの組合せは，決して頻度の高いものではない。この頻度に関する二人の解釈の仕方を示す次のような会話がある。夫人はロングとサーヴァーが人目を忍んでこっそりと出て行く（“slope”）のを見たと言う。

> “Exactly. They (i. e. Long and Server) met there—she and I having gone together; and they retired together under my eyes. They must have parted, clearly, the moment after.”
>
> She took it all in, turned it all over. “Then what does that prove but that they're afraid to be seen ?”
>
> “Ah, they're *not* araid, since both you and I saw them !”
>
> “Oh, only just long enough for them to publish themselves as not avoiding each other. All the same, you know,” she said, “they do.” (p. 73)

サーヴァーに心を寄せあくまでブリセンデン夫人の説に異を唱えながらも，内心すでにそれを確信している「私」は，次々と反論することによって夫人の当意即妙な答えを巧みに誘導し，そこから男女が一緒にいることの柔軟な解釈の可能性を引き出している。その解釈の仕方とは，問題の男女が人前で一緒にいるのを避けるのは，それを「見られるのを恐れるから」であり，逆に一緒にいるのは，「互いに避けているのではないという印象を与えるため」であるという。だとすれば，問題の男女は，その先入観ゆえに，一緒にいようが離れていようがいずれにせよ関係を疑われることになる。関係が単純な組合せの頻度で測られないとすれば，後は全て解釈次第ということになり，「私」が観察した組合せの意味を自分の「理論」に合致するように任意に読み取って行くことは，きわめて容易である。

このように，「私」の「観察」と言ってもその客観性は非常に疑わしいものであり，「理論」を正当なものと見なそうとする「私」の意図が，その解釈を歪めていることは充分に考えられる。

次に，同じく「理論」の裏付け作業として，他人との沈黙の会話，特に「目」や「しぐさ」によるコミュニケーションを利用している例をあげる。ある部屋で，一枚の絵を前にしてオーバートとロングが立っているのをサーヴァーとともに目撃した「私」は，その光景を次のように解釈する。

The distinguished painter listened while—to all appearance—Gilbert Long did, in the presence of the picture, the explaining. Ford Obert moved, after a little, but not so as to interrupt—only so as to show me his face in a recall of what had passed between us the night before in the smoking-room. I turned my eyes from Mrs. Server's; I allowed myself to commune a little, across the shining space, with those of our fellow-auditor. The occasion had thus for a minute the oddest little air of an aesthetic lecture prompted by accidental, but immense, suggestions and delivered by Gilbert Long.

I couldn't, at the distance, with my companion, quite follow it, but Obert was clearly patient enough to betray that he was struck. His impression was at any rate doubtless his share of surprise at Long's gift of talk. This was what his eyes indeed most seemed to throw over to me—"What an unexpected demon of a critic !" It was extraordinarily interesting—I don't mean the special drift of Long's eloquence, which I couldn't, as I say, catch; but the phenomenon of his, of all people, dealing in that article. (pp. 52-3)

「音楽」("a strain of music") のような中身を聞き取れない人の声を，ロングによる肖像画の「解説」または「講演」とみなし，離れたところからオーバートと目と目で「語り合った」「私」は，その「雰囲気」から，オーバートがその解説を感心して聞き入っているものと解釈する。そして実際彼の目つきが，「何という思いがけない批評の鬼なんだろう！」というメッセージを送ってきたと理解するのである。いわゆる非言語コミュニケーションの例であるが，この目くばせの意味が送り手と受取り手の間で果して一致していたかどうか，誰にも確認不可能である。近づいて行ってその「解説」をもう一度聞かせて欲しいと言う「私」に対して，ロングは絵の本質に関することを一言も口にしないし，後にオーバートに個人的にその話の内容を聞いたときも，彼の答えは「いかにも彼らしい，風変りで空想的でおかしな話」("Oh, characteristic ones enough—whimsical, fanciful, funny. The thing he says, you know ?" (p. 59)) というものであるから，なおさらその解釈は疑わしいと言わざるを得ない。しかし「私」はこの不確かなコミュニケーションに基づいて，やはりロングの知的成長は本物だと確信し，再び自分の「理論」の確かな「証拠」と見なしてしまうのである。

また，夕暮れ時，「魔法の城」("castle of enchantment" (p. 128, 130)) を思わせるような庭園の中の美しい一角でサーヴァーに出会った「私」は，彼女のある何気ない身振りから，彼女の秘密を捕らえたと確信する。

I hesitated. . . to commiserate her for it more directly, and she spoke again before I had found anything to say. . . . "What is it that has happened to you ?"

"Oh," I laughed, "what is it that has happened to *you* ?" My question had not been in the least intended for pressure, but it made her turn and look at me, and this, I quickly recognised, was all the answer the most pitiless curiosity could have desired—all the more, as well, that the intention in it had been no greater than in my words. Beautiful, abysmal, involuntary, her exquisite weakness simply opened up the depths it would have closed. It was in short a supremely unsuccessful attempt to say nothing. It said everything. . . . I saw as I had never seen before what consuming passion can make of the marked mortal on whom, with fixed beak and claws, it has settled as on a prey. She reminded me of a sponge wrung dry and with fine pores agape. Voided and scrape of everything, her shell was merely crushable. So it was brought home to me that the victim could be abased, and so it disengaged itself from these things that the abasement could be conscious. That was Mrs. Server's tragedy, that her consciousness servived—survived with a force that made it struggle and dissemble. This consciousness was all her secret—it was at any rate all mine. (pp. 135-6)

「あなたにはどんなことが起こったのですか」という問いに対して，彼女が「振り返って私を見た」というただそれだけのしぐさが，「全てを物語っていた」のであり，そこから「私」は最も知りたかった彼女の秘密を直感的に読み取ってしまう。すなわち，彼女が恋人の情熱の犠牲になってカスカスの「スポンジ」のように枯れ果てていること，そして何よりそれを自覚して苦しむだけの「意識」が彼女に残っているということである。これもまた非言語コミュニケーションの極端な例であるが，先の例と同様，伝達の正確度には限りない疑惑がつきまとう。サーヴァーが振り返るしぐさにこれほど深遠なメッセージが込められていたとは，誰にも確認するすべがないのである。しかし再び，この場面は彼の「理論」を裏付けるさらなる「証拠」となる。なぜなら彼女が自覚的であるという認識によって初めて，「私」は，彼女の美しさと次々と相手を替える落ち着きの無い行動とを，自分の「理論」に結び付ける確かな理屈を手に入れるからである。その理屈とは，彼女が自己の白痴化を自覚し，それを他人に気どられるのではないかという恐怖から，発覚する前に短時間で切り上げ相手を替えて行くのであり，その際，彼女の人眼を欺く美しい微笑が，単なる沈黙を豊かな弁舌にみせかける技巧として大いに役立っているというものである（pp. 138-9)。しかもこの理屈が，彼女が苦心して隠そうとしているものは何かという点に思い巡らした際にすでに「私」が想像し，その後のブリセンデンとの会話の中でもヒントを得て自信を深めていた，正にそのままの内容であったことは注目に値する。「私」は，先のいくつかの例と同様，あらかじめ想像によって予定した内容を，どのようにも受取れるささいな出来事を取り上げ，主観的で意図的な解釈を行うことによって，単になぞり直しているに過ぎないように見える。このことについて，「私」は「人

並外れた好奇心が観察を産み，観察が想念を産むのだ」（“That (i. e. my extraordinary interest) breeds observation, and observation breeds ideas.” (p. 147)）と言っているが，それに加えるとすれば，「私」の場合，しばしば想念が観察に先立ち，観察は想念の確認のために行われるのである。

以上例をあげたような「観察」や「目くばり」・「しぐさ」の解釈は，作品中あまりに頻繁に現れ，逆にそうでない部分を探す方が難しいと言っても言い過ぎではない。「私」の「理論」の裏付け作業は，理詰めに論理的に行われているかのような表層にもかかわらず，内実はその解釈に恣意的要素が多分に含まれており，それが読者の共感を遠ざけていることがわかる。

では最後に，実際に言葉を介して行われるコミュニケーション，他の人物との「会話」の場合はどうであろうか。「私」のいわゆる「腹心の友」に相当するのは，画家のオーバートとブリセンデン夫人であり，まず冒頭部分でオーバートにはブリセンデン夫妻の若さの移動を打ち明け，ブリセンデン夫人にはロングの知性の変化と彼の恋人を探す条件を打ち明ける。その後も「私」はこの二人と何度か言葉を交わすが，あたかも秘密を漏らしたことを悔やむかのように，それ以上本心を打ち明けることはない。この二人を含む登場人物達とのやりとりは，むしろ「私」の想像の客観性を確認し，新しい情報を得るためのものとして意識的に利用されることが多い。必然的に，「私」の言葉には嘘や矛盾が多く，またわざと曖昧に表現して相手の出方を見る場面が目立つ。

例えば，「私」が漏らしたブリセンデン夫妻の秘密に刺激を受けたオーバートが，その「類比の松明」に照らして，独自にサーヴァーの変化の原因となった男性を探そうとしていることが明らかになる場面があるが，この時の「私」のオーバートに対する反応は疑瞞に満ちたものである。まず「私」は，オーバートがサーヴァーは与えているのではなく与えられていると「誤解」し，彼女に与えている男性を探そうとしていることを知って安堵する。彼が「真相」をつかむ可能性は薄いと見たからである。(pp. 64-5) しかし，依然としてサーヴァーの変化を実感できない「私」は，オーバートが何に注目して彼女の恋人を探す手がかりを手に入れたのか聞き出したいという強い欲望と，一方自分がブリセンデン夫人から聞き出した情報（ロングとサーヴァーの関係の可能性）については決して彼に知られたくないと身構える気持ちとの間で，絶えず微妙に揺れ動いている。(“I hadn't really made out at all what he was impressed *with*, and I should only have spoiled everything by inviting him to be definite. This was a little of a worry, for I should have liked to know; but on the other hand I felt my track at present effectually covered.” (p. 67)) このため，この場面での「私」の言葉は，一貫して，自分の本心を隠したまま，オーバートが不用意に彼の本心を漏らすよう誘導しようとするものとなっている。こうした徹底した警戒心には，自分よりサーヴァーをよく知り，人を観るより鋭い目を持っていると認めるオーバートに対する「私」の対抗意識と，「理論」を一人じめしたいという強い独占欲が感じられ，結果的にそれが二人の会話を歪めていることが読み取れる。

またサーヴァーとの会話の中で，「私」が名前を特定しないでブリセンデンのことを「彼」と呼んだため，彼女が不安気な様子を示したのを見て，完成した自分の「理論」を初めて実地に試してみるまたとない「客観テスト」（“objective test”）のチャンスが到来したと喜ぶ場面がある。これをロングだと取れば，サーヴァーが思わず本音を漏らしてしまったことになるというわけであり，一瞬「私」は目くるめくような興奮を覚える。そしてしばらく名前を伏せたまま会話を続けてサーヴァーを苦しめ，最後にブリセンデンの名前をあげたときの彼女のほっとした様子を見て，「私」は知的優越感に酔いしれるのである。これは，繰り返し強調される「私」のサーヴァーに対する保護的な思いとは裏腹に，自分の「理論」確立のためには何ものも犠牲にしてはばからない，「私」の冷酷さを垣間見させる場面でもある。（“that it kept her for some seconds on the rack was a trifle compared to my chance.” (pp. 142-3)）そして何より，「私」の強い満足感にもかかわらず，サーヴァーの本心を確認したと言える根拠は皆無であり，実はこの「客観テスト」は全く機能していないのである。

以上見たように，「私」の「会話」は一方的で意図的なものであり，相手からみれば疑瞞に満ちたものであることは否定できない。またその解釈を巡っては，前述の例と同様，一人よがりで誘導的な要素が目立つ。「私」は自分の計算通りに「会話」を利用しているつもりであるが，裏を返せば，こうしたきわめて作為的な「私」の言葉に対して，相手の言葉がどれほどナイーヴに真意を伝えているものか，甚だ疑問である。一方，慎重に選ばれた台詞と台詞との間には「私」自身の本心が詳しく述べられており，ある意味では「私」にとって真の腹心の友は読者であるとも言える。しかし，その読者もまた，彼に対して無防備ではいないのである。

こうして「私」の怪奇的「理論」は，観察によっても言語または非言語によるコミュニケーションによっても，正確な読み取り・伝達が行われないまま，「私」の主観という閉塞した空間の中でのみ連鎖的証拠付けがなされて行く。言い替えれば，その着想からすでに論理のズレを見せたこの「理論」は，その確認のためという名目のもとで，さらなるズレを積み重ねて行くのである。このズレは過剰で非人間的な想像力が生み出したものであるが，この物語の語りそのものが，想像をいつの間にか現実とすり替えながら，さらにそれを前提に新たな想像を積み上げるという構造を持っており，やがて現実の手痛い応報が待っているのは自然な成行きであると言える。それはマザー・グースのなかの「二枚舌の男」（“A Man of Double Deed”）[(6)]を連想させる。この「男」は，「・・・のような」（“like”）と形容した比喩にすぎないものを実在するものと見なし，それを前提にさらなる比喩を重ね実在性を付与し続けて行った結果，その頂点において自らの嘘の犠牲となって死に至るのであった。「私」の運命はこれときわめて類似している。そして読者は，奇妙な一貫性を持ったこの連鎖上のどこかで，巧妙な論理の罠に気づくのである。これこそ，読者が完成させようとするもう一つの「理論」，いわば，罠読み取りの「理論」である。

魔法の解けるとき

結局，「私」の「理論」の真の完成は，意外な角度から訪れる。ロングとサーヴァーの関係を確信しつつもその決定的瞬間を捕らえることのできなかった「私」は，サーヴァーとブリセンデンという頻繁に見られる組合せによって，間接的にその裏付けができたと考える。すなわち，犠牲となった者同志が共通の運命を意識し，その連帯感から親近感が生まれ互いをいたわり合い励まし合うようになったのだという見方である。(p. 140) ブリセンデンとの会話の中で，彼が頼りなげなサーヴァーに親切にしてやりたいと思い，彼女もそれを望んでいるように感じると証言したことによって「私」は意を強くしたわけだが，この証言と「理論」の完成との間には，なお「私」の想像力が埋めねばならない大きなギャップがあることは言うまでもない。「私」はこのサーヴァーとブリセンデンの組合せを「私の理論の全開した花」("the full-blown flower of my theory" (p. 169)) と考え，それと均衡を保つべくもう一輪の「全開の花」を咲かせることはできないものかと夢想する。すなわち，恩恵を獲得した者同志の親近感，ロングとブリセンデン夫人の組合せである。ところがその数分後，「私」は望んだ通りの組合せを目撃し，「二人は一心同体だ」("They *were* as one" (p. 182)) と興奮して見つめることになる。この二人は物語の冒頭にも堂々と揃って登場したわけであるし，客観的にはそれほどの意味が隠されているようには見えない。しかし，例によって，単なる「偶然」もそれを待ち望んでいた「私」にとっては，否定し難い「必然」と映るのである。「私」はロングとブリセンデン夫人も，サーヴァーとブリセンデンと同じように自分達の立場を意識し始めたのだと認識する。結局，強引で誘導的な解釈によって，「私」の「理論」は二組の類似した関係を持つ男女と，そのうち共通の運命を持つ者同志の二組の連帯，そして彼らの自分達の関係全体の自覚という四巴の対称図形で完成するのである。(7)

こうして知的野心を満たし，勝利の興奮に酔いしれるはずの「私」は，しかし，不思議な不安を表明する。「現実の世界では物事は釣合いを保たぬのが常であり，二組の男女の見事な対称形は人工的な釣合いにすぎない」("Things in the real had a way of not balancing; it was all an affair, this fine symmetry, of artificial proportion." (pp. 182-3)) と言い，またロングとブリセンデン夫人に自分達の関係を自覚させてしまった結果，この関係が「内部から動揺し，割れ，裂け始める」("begin to vibrate, to crack and split, from within" (p. 184)) のではないかと恐れるのである。つまり，「私」は自分の「理論」が現実から遊離した人工的な紛い物であることまではっきりと自覚しており，一方問題の関係は当事者達が無自覚でいてこそ完全なバランスを保つのだと考えている。「意識」は常に見る「私」の側に閉塞していなければならず，見られる対象が「意識」を持つことは彼の「理論」の崩壊を意味するのである。「私」が，完成した「理論」を「大きな輝くガラスの宮殿」("a great glittering crystal palace" (p. 205)) に譬えるのは，壮大さと同時にそのはかなく危なげなバ

ランスをも象徴していると言える。

「理論」が足元から崩れるような不安感は，実は物語の全体を通じて繰り返し表されていた。「私」は，「考え出すことはすなわち実現すること」（“to have thought it was to have brought it” (p. 129)）であると言い，全ては自分の「神のごとき采配」（“providential supervision” (p. 154)）によるものであり「自分以外の人は何も分かっていない」（“*I* alone was magnificently and absurdly aware—everyone else was benightedly out of it.” (p. 177)）と豪語する一方で，全ては「ばかげた妄想」（“ridiculous obsession” (p. 89)），「狂乱した誤信」（“frenzied fallacy” (p. 177)）であり，自分はどうかしてしまったのではないか，という自己不信が繰り返し訪れる。この作品は，ある意味では「私」の自信と不安の絶えざる交錯の物語でもある。

物語の結末部分，パーティー終了後に行われるオーバート，ブリセンデン夫人と「私」との会話は，「ガラスの宮殿」に与えられる最後の試練である。それに堪えられれば，この「宮殿」はまさしく「私」の自負の象徴となるはずであった。

二人の腹心の友とのこれらの会話は，一見してそれまでの物語の一貫性を大きく崩し，一層曖昧なものになっていると言える。しかもその崩れは，「私」に起こるのではなくて二人の友人の側に起こるのであるから，なおさら厄介である。「私」は，それにもかかわらず，超人的な粘り強さでぎりぎりまで自己の一貫性を守ろうとするが，読者はようやくつかんだはずの読み取りの「理論」が崩されることに，不安と苛立ちを感じ始める。何を手がかりに物語を読み進んで行けばよいのか，理解の基準を失うからである。

まずオーバートは，昨日の彼の話と打って変わって，サーヴァーが知性を取り戻したと報告する。そしてサーヴァーが回復した理由を，オーバートも「私」もともに「知っている」と言うが，互いに相手の考えを探ろうとして曖昧なほのめかしを交すばかりで，何を「知っている」のかはっきりしない。オーバートは，「私」から渡された「類比の松明」を頼りに闇を抜け，「日の光」の中へと出てきたと言う。しかしその「日の光」の正体は次のようにきわめて曖昧である。

> “What I call the light of day is the sense I've arrived at of her vision.”
>
> “Her vision ?”—I just balanced in the air.
>
> “Of what they have in common. *His*—poor chap's—extraordinary situation too.”
>
> “Bravo ! And you see in that—?”
>
> “What, all these hours, had touched, fascinated, drawn her. It has been an instinct with her.”
>
> “Bravissimo !”
>
> It saw him, my approval, safely into port. “The instinct of sympathy, pity—the response to fellowship in misery; the sight of another fate as strange, as monstrous as her own.”

I couldn't help jumping straight up—I stood before him. "So that whoever may have *been* the man, the man *now*, the actual man—" (pp. 223-4)

オーバートが独力で「私」と同じ「ガラスの宮殿」を建てたことを匂わせる，思わせぶりな表現が断片的に並び，「私」を大いに興奮させたこの瞬間，当のブリセンデンが妻からの伝言を持って姿を現し，この話は絶ち切れになってしまう。「私」は，ここに至ってものごとのつじつまが合わなくなってきたこと（"Things had, from step to step, to hang together, and just here they seemed to hang a little apart"）に気づき，「自分の想像は全て，サーヴァーの状態の解釈に基づくもの」であり（"My whole superstructure reared itself on my view of Mrs. Server's condition"），「自分が立つ倒れるも彼女の知的能力次第である」（"what I stood or fell by was that (i. e. the question) of her faculty"）ことを思って不安にかられる。その結果，「私」は次のように考えることで自分の「理論」の一貫性を保とうとする。すなわち「ロングは，サーヴァーが賢くなったのと同じ驚くべき過程を経て，完全に無能化したのだ」（"by a process not less wonderful, he himself was all wrong"）とし，だからこそ「その事実を隠すために，ロングは普段の社交好きから一変して孤独を好むようになったのだ」（"If he was all wrong what more consequent than that he should have wished to hide it, and that the most immediate way for this should have seemed to him, markedly gregarious as he usually was, to keep away from the smokers ?" (pp. 230-1)）というわけである。

「私」はオーバートとの会話の試練をしのぎ，かろうじて「理論」の一貫性を維持する。それどころか，自分が与えるよりはるかに多くの情報をオーバートから聞き出し，しかもブリセンデンの伝言がサーヴァーからのものであるという間違った印象を与えて相手を混乱させることに成功したと信じて彼と別れる。しかし，何がオーバートの認識を変えたのか，または何がサーヴァーの知性を回復させたのか，さらにオーバートはどんな真相を捕らえたのか依然として不明であり，読者は不可解なままに置き去りにされる苛立ちを禁じ得ない。そしてそのまま，さらに悪夢のようなブリセンデン夫人と「私」との深夜の会話へと引き込まれるのである。

ブリセンデン夫人と「私」の会話は，その時間の非常識さがものものしさと怪しさを助長し，一層緊迫したものになっている。彼女は話し始めるとすぐ感じられるように，それまでの彼女とは別人のように変わっている。「話題にしてきた問題など無意味であり，それに関して話すことなどない」（"It's nonsense. I've nothing to tell you. I feel there's nothing in it and I've given it up." (p. 250)）と言うのには，「私」同様読者も唖然としてしまう。そして彼女はロングの相手はサーヴァーではないと言い，しかもロングの相手は依然としてわからないと突き放すように言う。あまりの変わりように，「私」はこれはロングの差金に違いないと考えざるを得ないのである。「私」は繰り返し，同じ問題を夢中になって追いかけて来たではないかと今までの彼女自身を思い出させようとするが，

ほんの一日のことであるにもかかわらず，彼女の反応はまるで遠い過去のことのようである。「私達の目的って何のことですか」（“what do you call with such solemnity our purpose ?”）と言い，「一体何のお話のつもりですか」（“what you consider you're talking about ?”（pp. 260-1））と言うのを聞いて「私」がさらに詰めよると，彼女は次のように「私」を批判するのである。

> “I mean you're carried away—you're abused by a fine fancy: so that, with your art of putting things, one doesn't know where one is—nor, if you'll allow me to say so, do I quite think *you* always do. Of course I don't deny you're awfully clever. But you build up . . . houses of cards.”（p. 262）

実際この批評は，空想力過剰なために他人に理解できない言葉を述べ立てることの多い「私」の欠点を，よく言い当てている。そして，「私」の自信と不安の象徴である「ガラスの宮殿」は，あたかもシンデレラのカボチャの馬車のように，深夜を過ぎるとともに安っぽい「トランプの家」に変わってしまうのである。全ては思い込みであり，魔法にすぎなかったのだろうか，という脱力感が一瞬読者を襲う。それは，懸命に築いてきた読み取りの「理論」が，色あせて見える瞬間でもある。オーバートもブリセンデン夫人も，なるほど魔法が解けたように別人になった。そしてサーヴァーも知性を取り戻したと言う。しかし，単純なおとぎ話仕立てに解釈するには，この物語も登場人物達も，あまりに複雑怪奇である。

一方「私」は，魔法が解けてなお，「トランプの家」を「ガラスの宮殿」だと信じて必死に武装する。「理論」の一貫性に異常なほどの執着心を燃やす「私」は，結局，ブリセンデン夫人が深夜にやって来て，いつまでも引き上げるでもなく居残り苦し紛れの嘘をついているのは，ロングとの秘密を見抜いた「私」を「まるめこむ」ためだ（“She had come down to square me; she was hanging on to square me; she was suffering and stammering and lying; she was both carrying it grandly off and letting it desperately go: all, all to square me.”）と考える。そして，二人が「私」の干渉を嫌ったわけは，二人の犠牲となった二人が，「私」の手助けによって結び付き，ともに逃げ出すことを恐れたためだと言うのである。(p. 273) さらにどこで方向転換したのか教えて欲しいと詰めよる「私」に対して，ブリセンデン夫人はただ一つの判断，「私」は「狂人」（“crazy”（p. 278））であるという判断によって，結論が出たと言う。しかし「狂人」というレッテルほど，全ての意味を無に化してしまうものはない。いわばこれは「私」の「理論」の完全な，徹底した否定と認識してよいだろう。彼女はロングについても，「彼はきわめつきの大馬鹿だ」（“Why, don't you know he's a prize fool ?”（p. 292））と言い，しかも過去のことではなく現にそうであることがわかったと言う。これに対して「私」は，全てを自覚するに至ったロングが，今度は「愚鈍を装うことによって保身を計ろうとしている」（“his excited acuteness was henceforth to protect itself by dissimulation”

(p. 294)) と考えてさらに「理論」の一貫性を維持しようとするが，読者にとって，この努力はもはやあまりに空虚に映ると言わざるを得ない。そして全ての意味を決定的に無化して行くのは，物語のほとんど終わり近く，論理の矛盾を「私」に突かれ続けたブリセンデン夫人が，「他人を傷つけたくなくて，恥を忍んで半分馬鹿の真似をしていた」のであり，時には「真実を歪め」，「嘘の説明さえした」が，こうなったからには「他人のことなど構わず真実を話そう」("I've had to protect others and, at the cost of a decent appearance, to pretend to be myself half an idiot. I've had even to depart from the truth; to give you a false account of the manner of my escape from your tangle. But now the truth shall be told, and others can take care of themselves !" (p. 302)) と言う場面である。この一言によって，これまでの全ての会話，いや物語全体が無意味なものと化してしまう。まさしく「真実」とは一体何なのか，または，そもそも「真実」など存在したのか，という空虚な思いが物語全体を遡って行く瞬間である。この瞬間，あらゆる「理論」，あらゆる「意味」，あらゆる「一貫性」，そしてあらゆる「努力」は意味を失う。その後夫人が告白する内容は，ロングの相手はラトリー卿夫人であること，それを夫ブリセンデンから聞き知ったこと，また同様に夫からサーヴァーがブリセンデン自身に言い寄っていたと聞かされたこと，そして夫によればサーヴァーは「恐ろしく鋭い」("awfully sharp" (p. 317)) 女性であることである。これらは全て今までの一貫性をさらに崩すものである。しかし，こうした言葉は，すでにいかなる意味をも失っている。意味の無法地帯と化した現実を前に，「私」と同様読者も，この場所を逃れることによってしか自分を取り戻すすべはないのである。

曖昧さの意味

こうして物語全体を辿ったとき，それが「私」による「理論」完成への着実なプロセスと，その徹底した無意味化のプロセスという，一つの対称形をなしていることが確認できる。積木くずしにも似たこの物語の空虚さは何を意味しているのだろうか。

「理論」完成へのプロセスは，非現実的な仮定に始まりその不確かな証拠付けへと，想像力によって意味を無限にずらすことによって，結果的には現実から大きく遠ざかって行く過程を意味していた。「私」による状況の独断的解釈や他の登場人物との不毛なコミュニケーションゆえに，読者は，物語の語りとの間の確かな意味伝達を徐々に遮断されることとなる。しかしそのズレの重ね方に一定の方向性，規則性があることを見抜き，それを物語の謎を読み解く際の「理論」として活用することによって，読者はかろうじて語りとの接点を維持し得たと信じたのでる。すなわち，謎めいた現実を前に，それを読み解く「理論」を完成しようと懸命になる「私」の姿は，そのままこの物語を読み解くための「理論」の完成を目指す読者の姿でもあったのである。

しかし先に見たように，この二つの「理論」は，その完成後，「私」と二人の腹心の友との間で交わされた会話によって，その論理の構築を完全に崩されてしまう。それは，新たな理論による反論ですらなく，意味の積み上げそのものを無化する「理論」の根本的否定であった。二人の言葉にはそれまでの二人のイメージとの間に一貫性が無く，またその変化を説明する論理性も認められない。とりわけブリセンデン夫人の場合は，苛立つ「私」の問い詰めに対して，あくまでしなやかに身をかわしてその意味付けを逃れつつ，根拠の無い情報を断片的に散りばめているかのような印象を受けるのである。

これについては，二人の人格が突然に変わってしまったと考えるより，二人がきわめて意識的にこうした会話を成立させていたと理解した方が自然である。物語の前半部分，「私」から奇妙な「理論」を聞かされたときの二人が，「私」と同程度またはそれ以下の意識しかなかったと想定することは容易である。だからこそ「私」とともに謎解きに夢中になり，時には「私」に優越感を与えるような無防備な会話が成り立ったのである。しかし最後の会話部分での二人は，非常に意識的であり，「私」の意識を上回った高みから逆に「私」を翻弄し，混乱を誘っているようにも見える。物語のどこかの時点で，彼らの内に「私」に対するこうした意識の逆転が起こったのは確実である。二人は，「私」自身を「観察」の対象とし危険人物と見なすようになった結果，意識の自然な防衛本能から，自分達が無自覚に関わってしまったあの狂気じみた「理論」を，もと通り解体しておきたいと考えるに至ったのではないか。彼らの「私」に対する警戒心は，ブリセンデン夫人の次のような言葉によく表れている。

> "people have such a notion of what you embroider on things that they're rather afraid to commit themselves or to lead you on: they're sometimes in, you know, for more than they bargain for, than they quite know what to do with, or than they care to have on their hands." (p. 298)

しかし，危険人物である「私」に対して意味や論理で対抗することは，新たな妄想を生み出させることでしかなく，賢明な方法とは言えない。二人にとって最も有効な方法は，完全な意味の放棄，論理性の欠如で対抗することだったのである。まさしく，「私」が予言した通り，「理論」はそれに関わる自分以外の人物の「意識」によって，「内部から動揺し，割れ，裂け始め」，ついに完全な崩壊に至ったのである。

同様のことが読者の「理論」についても言える。すなわち，読者の「理論」は絶えず「私」の意識だけを追ってきたのであり，それに対する他の登場人物の意識は，それを補うものではあってもそれに逆らうほどの強さを持つものではなかった。他の人物の言葉の中に，「私」の「理論」の客観性を裏付けるものがあるかどうかが問題となっても，彼らが意識的に嘘をついて「私」を欺いている可能性はほとんど計算に入れられていないのである。しかし最後の二人の人物の会話は，「い

つから彼らが意識を持ち始めたのか」ということに思い至らせるものであり，また意識を持つのが一人「私」だけでないことを強烈に主張するものとも言える。これを考慮に入れつつ物語を振り返るならば，この二人に限らず物語中の全ての人物の行動と言葉は，必ずしも本心または真実を表しているとは限らないもの，それどころかきわめて意識的で意図のあるものとも見えてくる。例えば，夫人によれば，今まで実直で信頼がおける印象の強かったブリセンデンは，実は全てを冷静に見つめ把握していた人物であり，また弱々しくて内容のある会話など何もできないと見られていたサーヴァーが，実は「恐ろしく鋭い」女性であると言う。その言葉の真偽は別としても，今までのブリセンデンとサーヴァーの行動と言葉を，全く別の意味を持つものとして解釈し直す可能性が有効性を帯び始めることは否定できない。とするならば，「私」同様読者にとっても，この作品を読むために積み上げてきた全ての意味が，「私」以外の他の登場人物達の「意識」によって，「内部から崩壊し去った」と言えないだろうか。読者の「理論」は，「私」が他の人物と交わしてきた様々なコミュニケーションにおけるズレの認識から起こったのであり，そのズレの測定の基準となったのは無自覚な他の人物の行動や言葉への信頼に他ならなかったのである。

この点に関しては，双生児の片割れとも見なされる「ねじの回転」と比較してみるとより明確になる。「ねじの回転」では，この作品と同じように，視点人物の意識と現実とのズレの認識が物語の読み取り上重要な意味を持つが，そのズレを測るための基準と見なすことのできる人物がはっきりと存在していた。つまりグロース夫人（Mrs. Grose）である。読者は，グロース夫人の決して鋭くはないが常識的で善良な反応をほぼ完全に信じて，それを基準としつつ女家庭教師の行動や言葉の異常さを徐々に認識して行ったのである。同様のことが同時代の作品である『メイジーの知ったこと』（*What Maisie Knew*, 1897）についても確認できる。メイジーの認識と現実とのズレを読み取る基準となったのは，赤面と苦笑に満ちた回りの大人達のきわめて世俗的な反応であった。メイジーが子供であるために，彼らは比較的無防備にその本心を漏らしていたのである。言ってみればこの作品には，グロース夫人やメイジーを巡る大人達に相当する現実との接点が，意識的に排除されている。全員が様々な（時には狂気じみた）意識を持つ女家庭教師だと想定すれば，この作品の持つ極端な相対主義がさらに明らかになるだろう。つまり，全ての人物が「私」になり得たのである。

こうしてジェイムズは，無数の意識の混在する意味の混沌へと，「私」のみならず読者をも導き入れ，しかも一切の救済を拒絶する。「私」は現実を読み取るための有効なコミュニケーションの可能性を完全に絶たれ，また読者は作品読み取りのためのあらゆる意味伝達の可能性を絶たれる。『聖なる泉』がニューヨーク・エディションの選考から外され，ジェイムズ自身の解説も与えられなかったことを思えば，その封印がいかに意識的で徹底したものであったかが窺い知れよう。この作品は，アメリカとヨーロッパに象徴される二極のバランスの上に立って生き，またそれをテーマに創作をして来たジェイムズが，その二極性の基盤となったものをも解体し，さらに大きな多極間

のバランスへとその相対主義を徹底し，拡大して行った結果生まれたものと考えられる。この混沌とした現実を，苛立ちを持って放棄するか，逆にそこに限りないリアリティを読み取って甘受するかは，読者に任せられた選択である。

W. フォーレット（W. Follett）が言うように，この物語が，無から有を生むように人工的で意識的な世界を構築して行ったジェイムズの，「自己のパロディ」であるという解釈はある意味では当たっているだろう。[8]彼にとって，創作の対象である現実は，まさしく相対的な無数の意味の混在した世界であり，そこで頼るべきものは，自己の意識と想像力が作り出す彼独自の閉塞した「理論」に他ならなかったであろうことは想像に難くない。しかし，さらに大きく解釈するなら，誰にとっても現実はこうした捕らえどころのない空虚さを内に秘めたものであり，そこに一瞬意味ある「理論」を見いだしたところで，それは交錯する多様な意味の中に，再び埋もれて行くべきものに違いない。その意味では，この作品に20世紀的な現代性を見だしたR．P．ブラックマー（R. P. Blackmur）の評価は，さらに優れたものであると言えるだろう。[9]パロディーとして，また嘲笑の対象として見るには，この物語の持つ意味はあまりに深刻でありリアルである。捕らえ難い現実，不確かなコミュニケーション，読み取り難い語り，そして錯綜する無数の意味と限りない相対主義――その全てが20世紀モダニズム文学の到来を，確かに予告していたと言えるだろう。

注

(1) Jean Frantz Blackall, *Jamesian Ambiguity and 'The Sacred Fount'* (Cornell University Press, 1965)

(2) Rebecca West, *Henry James* (Maskell House, 1974) pp. 107-8. ". . .he records how a week-end visitor spends more intellectual force than Kant can have used on *The Critique of Pure Reason* in an unsuccessful attempt to discover whether there exists between certain of his fellow-guests a relationship not more interesting among these vacuous people than it is among sparrows."

(3) D. W. Jefferson, *Henry James and the Modern Reader* (Oliver & Boyd, 1964) p.176. "On the first reading or readings of The Sacred Fount (1901), the desperate need to solve the riddle is liable to inhibit other kinds of interest. When the riddle has been abandoned as insoluble, the novel can be enjoyed as other novels are enjoyed."

(4) Henry James, *The Sacred Fount* (Grove Press, 1953) p. 2. 以下ページ数は本文中に記す。なお日本語訳は青木次生訳（国書刊行会版）を参考にさせていただいた。

(5) cf. Leon Edel, "An Introductory Essay", *The Sacred Fount*, op. cit., pp. xxv-vii. エデルはこの点についてジェイムズの自伝的要素をあげている。著名だが優柔不断な父と，父を支え全てを捧げ尽くして亡くなった強い母というジェイムズの両親像をあげ，そこから，彼が愛情とは人を枯渇させ，破壊する力を持つものと信じていたと指摘する。

(6) "A Man of Double Deed": There was a man of double deed / Sowed his garden full of seed. / When the seed began to grow, / 'Twas like a garden full of snow; / When the snow began to melt, / 'Twas like a ship without a belt; / When the ship began to sail, / 'Twas like a bird without a tail; / When the bird began to fly, / 'Twas like an eagle

in the sky; / When the sky began to roar, / 'Twas like a lion at the door; / When the door began to crack, / 'Twas like a penknife in my back; / When my heart began to smart, / 'Twas like a penknife in my heart; / When my heart began to bleed, / 'Twas death and death and death indeed.

(7) この四巴の対称図形は，『黄金の杯』や『メイジーの知ったこと』にも使われており，徹底した対称性を強調するためにジェイムズが好んで用いたものと思われる。

(8) Wilson Follett, "Henry James's Portrait of Henry James," *The New York Times Book Review* (August 23, 1936)

(9) R. P. Blackmur, *Studies in Henry James* (New Directions, 1983) p. 47. "*The Sacred Fount* is not a novel as the novel then stood at the turn of the century nor within Mr. Follett's estimation of the form a generation later. But it is certainly a novel, or a use of the novel to a preponderant degree, in the sense that we call the works of Virginia Woolf, of Proust, of Kafka and of Joyce, novels. It would seem that James had not only predicted the course of a good deal of modern fiction but had indeed actually anticipated a good many of its novelties of form."